まじっくガーデン

氷砂糖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
まじっくガーデン

【Ｎコード】
Ｎ９２１７Ｍ

【作者名】
氷砂糖

【あらすじ】
なかなか連絡をよこさない妹、マキナ。そんな天然な妹から来た久しぶりの手紙。
妹と同居することになり、ただの日常がいろんな意味で危険なものに変わった。
めんどくさがりでだめだめな作者の初めての連載です。

ぐだぐだな作品になりそうですが、出会ったひとはユルユルと見守ってやってください。

プロローグ

「そろそろかな？」

これ以上待てないといった顔で駅の名前を確認。

その頬に残るほんのりとした赤みが幼さを思い出させ、子供らしさを強調している。

「あ、席変わりましょうか？」

電車の中、席に座れずにおろおろしているおばあさんを見かけて声をかける。

「おやおや、お嬢ちゃん。ありがとねえ。そうだ、これをあげましょ」

おばあさんがポケットから取り出したのは、小さい飴玉。

それを私の手に握らせる。

「ありがとうございます」

もらった飴玉を口に含むと、イチゴの香りが広がった。

頬の赤みが少し増している。

リズムのよい歌を口ずさみながら、次の駅を待つ。

またいくつか駅を過ぎると懐かしい風景が目の前に広がった。

「もう手紙届いてるよね……」

心の中で久しぶりの眺めを楽しみ微笑む。

たった一人の兄の姿がその懐かしい風景に一致した。

第一話

前略　お兄ちゃんへ

私は先週、魔法学校を卒業しました。

今日朝一番に届いた手紙。その手紙はこんな風に始まった。

「そっか、もう六年たったのか」

俺はめんどくさがりの妹が送ってきた久々の手紙にいろんな思いをはせながら、続きを目で追った。

何ヶ月ぶりだろう。

魔法学校を卒業したので、これから一年以内に魔法薬の薬剤師になるか新しい魔術を開発する魔術師になるか決めないといけません。パンダに白黒はっきり決めろと言っているようなものです。それをはっきり決めたお兄ちゃんはすごいと思います。

絶対になにかが違うと思った。パンダに白黒はっきり決めさせたらただの熊になってしまうような気がする。それに、俺も魔術師として決めて生きてはいるけど、実際にはっきりとした区別はあって無いようなものだ。

絶対なにかが違うと思っているお兄ちゃん。そりゃそうですよね。

・・・・・見事に読まれてた。なんでだろう？

そんなすごいお兄ちゃんを私は尊敬するので、私は来週から居候させてもらいます。

・・・・・・・・・・・・。

ちょっと待て。いきなりか。

魔法学校から家に手紙が届くまで一週間。家まで来るのも一週間。

なにか因縁めいたものと嫌な予感を同時に感じる・・・・・・。

家のインターホンがなり軽快な音楽が流れる。俺は恐る恐る玄関の扉を開く。

「ちわーす。郵便でーす」

・・・・・・流石に世の中そこまでドラマチックには出来ていないみたいだ。

俺は受け取りのサインを押し、荷物を受け取る。

「あざーしたー」

妙に態度の軽い郵便屋さんが帰ったあと、俺は荷物を家の中へと運ぼうとした、が。

「お兄ちゃん」

さっきまで郵便屋さんが居たところによーく見覚えのあるちっさい女の子が一人。

「お久しぶりー。今日からお世話になりまーす♪」

よく通る明るいが静かな森にこだました。

それは俺にとって騒がしい日常の始まりだった。

「ん・・・・・・」

ガラガらがっしゃーん

俺の朝は容赦の無い破壊音による騒音で強制的に目が覚める。

何だいきなり・・・・・・。

そういえばそうだった。昨日から妹が居候をしていたんだっけ。しかしうるさい。迷惑極まりない。あいつは何をしているんだ？

俺は寝起きでまだだるい体に鞭を打ち、叫ぶ。

「おーい。マキナ。うるさいぞ」

「あ、おっはよーお兄ちゃん」

俺の声に気付くと、マキナは一体何を考えたか俺の部屋の扉を開け、いきなり俺の胸に飛びついてきた。

マキナの長くのばした薄い茶色の髪が俺の顔へかかる。それ以上に女性としてロクに発達もしていない胸を当ててくるが、肋骨が当たって痛い上に、むなしい。

「わっ、バカ、何してんだ」

「二十二になってもまだ独身のお兄ちゃんに女の子の良さを教えてあげようと思って」

マキナは無い胸を少しでも強調しようと俺の顔面に押し付ける。

無駄なのに。

「や、やめろって」

「二年ぶりなんだし、お兄ちゃんが前までちっちゃいって言ってたマキナのがどれくらい大きくなったか見てもらわなきゃ。もうバカになんてさせないから」

「今だって無いだろ。バカ。っていうかお前には思春期ってものが無いのか」

俺にもあったよ。黒歴史・・・・・・思春期が。

「お兄ちゃんならいいの。思春期なんてすっ飛ばした」

大変なことになる前に性格を矯正したほうがいいかもしれない。そのうちに冗談で済まなくなる気がする。

「冗談で済まさなくってもマキナはうれしいよ♪」

・・・・・・今はゆっくり寝たい。落ちてくる瞼を必死で吊り上げながらもとりあえず破壊音をやめてもらうために行

動をはじめる。

「で、お前はなんで朝からこんなにうるさいんだ」

「えへへ、高い所にある魔法薬の材料をとろうとしたら、失敗しちゃった」

はあ、初日からこれか。これから先が思いやられる。

「それはいいとして、この匂いはなんだ」

さっきから鼻についていた刺激臭。

「・・・・・・さあ、しらないよ」

マキナはあからさまに目を逸らしている。

「マキナ、何か隠してないか」

マキナのそらした目線に無理矢理合わせて、問い詰める。

「ぎくっ、な、なにも隠してないよ」

「ご丁寧に擬音語まで用意して否定するやつを信じられるかっ」

「だから何も隠してないって！」

よく見るとマキナは左手を後ろにやって俺から見えないようにしている。どう見たってあからさまに怪しい。

「なあマキナ、腕相撲やらないか。お前が両手、俺はもちろん左手だ。勝ったらケーキを買ってやるよ」

「えっ、いいの、本当？」

そう言ってマキナは両手を思いっきり開き俺の手に飛びつく。

釣れたな。

……ころんっ

「あっ」

謎の玉の近くに薄紫の煙が立ち上っている。煙の近くは輪をかけて臭い。

「なんだこれ」

「えっと、お兄ちゃんの魔法薬の材料で、カメムシのにおいを目に見えるようにする玉」

「なんでそんなものを」

「人払いの薬の材料に使うカメムシが逃げ出しちゃって」

「早く見つけろおぉぉ！」

そんな俺の背筋に鳥肌が立つ。もぞもぞと動く何かが目の前に。

話は変わるが、俺は虫が嫌いだ。

生理的に受け付けない。小さい虫ならまだマシだが、大きいのになるとときどき意識が飛ぶ。

カメムシのサイズも例外でない。

目の前が暗くなる。

「にゃーーっ、お兄ちゃん大丈夫？」

追伸

俺はベッドの角に頭をぶつけて全治一週間となりました。

「トーマさん、トーマ・クライアスさん」

窓口で支払いを済ませると、俺は荷物を持って病院を出た。

一週間前に気絶したときの怪我がやっと治った。

だから仕方なくこうして病院のお世話になっているわけ。

「はぁ」

なんとなく気が重い。昔から病院は苦手だ。

「おにいちゃーん」

マキナが退院したばかりの俺の胸に飛び込んでくる。

「こらこら。あんまりくっつくな」

「えへへ、いいじゃん。マキナ、お兄ちゃん大好きだもん」

・・・・・・重症だな。ちょうどよく目の前が病院だ。

「いいか、おまえはそんなんでも女の子なんだからな。学校ではそういうこと気にしなかったのか？男子だっていただろ」

「いたけど、そんなこと気にしてられなかったよ」

そういえばそうだった。魔法学校も過疎化が進んでいて、授業も基本的に男女合同だった。

個人的に嫌な思いでもある。

例えば、武装解除の授業。相手の武装だけじゃなくて、服やアクセサリーとか、まあ色々と吹き飛ばされる。

単純に言うと、授業自体が凄惨な脱がし合いになる。

そして当然この授業も男女合同。毎回悲鳴が教室に響いた。主に女子。

俺は色々あってトラウマになっている。何が起きたか、ご想像におまかせ。

結果だけ言います。というか、人に言えるのは、授業のせいで初恋の女の子にフラれたことくらい・・・・・。

「残念だったねー。おにーいちゃん♪」

「妙にうれしそうだな・・・・・・」

マキナはどうだったんだろう。そのうち聞きたいな。

「おーい、マキナーっ」

第二部

「マキナ、もうお前も魔法学校を卒業したし、十五歳だろ。羞恥心くらい持て。その分だと、恥ずかしい思いでも結構あるだろ」

説教もかねて気になったことも聞いてみる。

「別にないよ。だって、マキナお兄ちゃん以外の人好きになったことないもん」

……思った以上に性格の矯正は難易度が高いらしい。

「それにお兄ちゃん、マキナはたった一人のかあーいぃ妹でしょ。少しくらい甘えさせてくれたっていいじゃん。じゃないと罰が当たるよっ」

何とかしないと本当にマキナに何かされそうで、少し怖い。

「ねえ、お兄ちゃんの退院祝いでご馳走作ってあるから早く帰ろうよ」

「おっ！少しは料理作れるようになったのか。二年前に帰ってきたときなんか家中を小麦粉だらけにしてたよな」

「あの時は可愛い小鳥さんがいっぱい来て面白かったねー」

「面白くないっての。今回は大丈夫だったろな。……こら、目をそらすな」

「まあまあ、料理は上手くいったんだから。ほら、早く早く」

「そうせかすなって。あっ。服を引っ張るなくっつくな」

「じゃあ急いでよ。マキナ、朝からお兄ちゃんと一緒にご飯食べるのすっごく楽しみにしてたんだよ」

「わーったわーった。静かにしろって」

……ったく、わかったって言ったら急におとなしくなったな。はは、よっぽど楽しみにしてたんだな。

そう思ったら無邪気な妹が急に羨ましくなった。

いつからだろうか。

特にここ最近は何かに熱中したり、無邪気に笑ったり、そういうことを全くしなくなった。素直に生きることを忘れていた気がする。

うーん。

だからといって、マキナにはちゃんとしたヤツを好きになってほしいと思う。

「お兄ちゃん。早くいこ」

無邪気なマキナが少し眩しかった。

そして、このマキナのテンションに俺は少し不安を感じた。

きっと何か起こる。と。

「お兄ちゃん。これ、可愛いねー」

「そうか、俺にはよくわかんないけど」

病院から家までの帰り道。小さな商店街で買い物をする。

マキナは熊に似たもさもさの人形を指して言った。

「つまらないの。……あっ、お兄ちゃん。あれ」

マキナが元気よく指差した方を見てみる。

にゃーにゃー

ほーほー

わんわん

こんなどこにいっても見られるような、もさもさふかふかあったかーいなこの子のおなか。ってかんじの生き物がいっぱいいた。

「お兄ちゃん。マキナの卒業祝い、黒猫がいい。魔法生物、憧れだったんだ。」

「んー、考えておくよ。ドジで物忘れのひどいお前が生き物を飼え

るとは思はないからな」

「えーーーっ」

マキナはとてつもなく残念そうな顔をする。そして泣きそうな目で小動物のように訴えかけてくる。

……少しだけ考えてやってもいいかな。

「よし、じゃあこうしよう。これから一か月の間お前がドジらずちゃんと生活できたら黒猫をかってもいいぞ。家のこともちゃんとやれな」

マキナの表情が明るくなった。

「じゃあ、御馳走食べに家にかえろっ。マキナ、今日から頑張るね」

さっき何か起こると思ったことはきっと気のせいだったんだろう。マキナの笑顔を見ていると、さっきのは間違いだったのだろう。そう思えた。

「お兄ちゃん。あったかいね」

……甘かった。危機に対する人のカンは結構働くもんだと改めて思った。

家が轟々と奇麗な赤に染まっていた。さっきまで家が有ったところには火柱が立っている。

俺とマキナはぬくぬくと暖をとり現実逃避。

「ごめんね。おにいちゃん。お料理は上手くできたんだ。けど、浮かれててガスコンロ消すの忘れちゃったみたい」

……さてと、これからどうしようか。とりあえず知っている奴のところを回ってみようと思う。

あ、そういえば幼馴染がいたな。ちょっとアバウトなやつだけど、マキナも知ってるし、ちょうどいいかもな。

「こんにちわー。ちょっとお邪魔しまーす」

少し棒読み気味だったかな。気をつけないと。

少し間が空いて明るい声が返ってきた。

「気ぃつけろー。爆発すっぞー」

「「ええー」」

二秒後に豪快な爆発音。

俺は全力で防御障壁を張り自分とマキナを守った。

「ありがとーおにいちゃん」

マキナは相変わらず抱きついてくる。いっそのこと、ここで性格を

ひっくり返す薬でも貰って行こうかな。

ここは俺の幼馴染が経営している薬屋。一応一般の人の目につく場所なので薬屋としてやっているらしいが、客の大半は俺やマキナみたいな魔法関係者だ。

さすがに魔法は一般人にばれると色々と大変なことになる。

前回幼馴染と会ったのはだいたい三か月くらい前。

そのアバウトな性格で一般の人に間違えて魔法薬を売ってしまい、尻ぬぐいに俺が駆り出された。

あの時は噂が広まって本当にめんどくさかった。

性格は明るいがちょっとせっかちで危なっかしい。魔法学校にふたりで入学する前からの付き合いだ。

「悪い悪い。で、何の用？家でも吹き飛んだ？」

店の奥からすたすたと現れ、いきなり核心をついた。

彼女の洞察力にはいつも驚かされる。なのにいつも爆発オチになるのはなぜなんだ？

「うん、全くその通り。悪いけどレイ、一か月くらい部屋貸してくんないかな」

肩まで伸ばした金髪がぼさぼさになっていることも気にせず人の前に顔を突き出して派手に笑った。

「あっはっはっは。まじかよ。ばっかじゃない。部屋？いいよ。一か月くらい」

顔立ちは整っている方だから、口さえ悪くなければなぁ。

「で、マキナも久しぶりじゃん。可愛くなってんな。前はめっちゃ小さかったのに。……あー、いまも小さいか」

レイは目線を顔より少し下に向けた。

「ちょ……レイ姉ひどーい。これでも少し大きくなったんだよ。でも、ほんとに久しぶり。やっぱりレイ姉顔キレーだなー。いいなー」

「ははは っ。ありがとな。マキナもそのうちお母さんみたいな美人さんになれるよ。あの人、すごく素敵だったからなぁ」

……だった。うん。今から八年前。俺が十四歳。マキナが六歳だった頃に行方不明になってしまったそのまま見つからないから、まだきっと生きている。少なくとも俺とマキナはそう思っている。

「らしくねえな。しんみりしちまって。まーいいや。部屋だったな。ちょっと汚いけど二階の部屋を貸してやるよ。あんまり広くないけど、我慢してくれな」

「ありがとうございます」

俺は軽く礼をいい、中に上がろうとする。

「おっと、ちょっと待て。焦げ臭いから先に風呂入って来い。それ

と……トーマ。なんか言葉が固っくるしいんだよ。前の時も言ったろ」

「そんなにかたくるしいか？」

「ん……なんとなくな。もうちょい肩の力抜いてもいいんじゃねえかな」

それもそうかもな。

「解かった。気をつけるよ」

「それが固っ苦しいって言ってんだろ」

頭に鋭い一撃。

「……まあ、部屋は改造さえしなけりゃ自由に使っていいかんな」

「しないよ。レイじゃないんだし」

「おいこらトーマ。お前まだ私がお前ん家の部屋を飛行機のコクピットみたいにしたこと根に持ってんのか」

「え、何のこと？」

俺は目線をレイから逸らしわざとらしく平静を作る。

「だいじょーぶ。レイの性格はよくわかってるつもりだから」

「そっ……それはどういう意味だぁーー」

顔を真っ赤にしたレイからのみぞおち直通のけり。
意識が薄れる。なのに気絶はしないから痛みはちゃんと感じる。
「ったく。人の気も知らないでいて」
レイがぼそり、と呟く。
「マキナ、こいつを二階に運ぶぞ。右足を引っ張ってくれ」
「う、うん」
マキナとレイは息を合わせ、すっかり倒れこんでしまった俺の足を引きずりながら運ぶ。
頭を打つ痛みですっかり目が覚めた。
「いっ、痛い痛い。ちょ、待てって……いたっ」
「ほら、この部屋だ」
俺を容赦なく投げ捨てる。
「……ったく、あのアホは鈍いんだから」
痛みで頭を抱えている俺を置き去りに、二人は笑いながら一階へと降りていった。
……なんだろな、この扱いは、

第三部

「ねえレイ姉、お兄ちゃんに使う惚れ薬もらっていい？」

真顔でマキナはレイに尋ねた。

「あのなぁ、一応言っておくけど惚れ薬って違法なんだぜ、ってかマキナ、それヤバイだろ」

「えー、別にいいじゃん。面白いよ」

おい、面白いってなんだ。

「まあでも、あいつに見境なく惚れまくる薬を飲ませるのも確かに面白そうだな」

「ね、でしょでしょ」

ヤバイ、非常にヤバイ。

「だからちょーだい、レイ姉」

「えーと、どこにあったっけなー」

探すな！

これは危険だ。早く逃げないと。

事の始まりは十分前。マキナと二人で埃だらけになった部屋を片付けた後だった。

「マキナー。ちょっとこっち来い」

階段下からレイがマキナを呼んだ。心なしか少し声が笑っているような気がした。

今までの経験上、こんな時はレイが何か悪ふざけを考えているときだ。

「はーい」

ついでにマキナも喜んでついて行った。

絶対何か起こる。確信。

マキナとレイの会話を聞こうと、ドアにへばりつき聞き耳を立てる。

「……マキナ、あの部屋実は隠しトラップがあるんだ」

ハァ、やっぱりか。それならさっき掃除してた時に見つけて片付けた。

床下にあって片付けるのが大変だったけどな。

でもとっくにゴミ箱行きだ。ざまみろ。はっはっは。

「……二十個くらい」

おい！待てなんだその無茶苦茶な数字は！

……下手に動けないじゃないか。

「だからさ、マキナを怪我させたくないし、そろそろ年頃だろ。な、」

「えー、マキナお兄ちゃんとがいい」

「ハハッ。重症だな。トーマの言ってた通りだな」

「むー。そんなこと言って、レイ姉ヤキモチ焼いてるんでしょ」

「なっ……何言ってんだ。別にトーマを好きだなんてことあるわけないじゃんか」

「えへへー、レイ姉顔真っ赤だよ」

んー、どうしたものやら。

「レイ姉、どうしたらお兄ちゃんに好きになってもらえるかな」

「……そんなこと、分かるわけない」

「なんでー？」

「なんでも。で、トラップだけど……」

このあとすぐに違う話題となり、ぐだぐだ話していたんだけど。

またマキナが惚れ薬とかいう変なことをひっぱり出してきた。

そんなこんなで今に至る。

分かってもらえたかな。

はぁ、でも本当に早く逃げた方がいいかもしれない……

カチッ

……カチッ？

状況を理解できない俺の足元で何かが音を立てる。

次いで爆発。

「あはは、あっはっはっはっはー」

バカみたいにわらっているレイの浮かれた声が聞こえる。

人がトラップに引っかかったことがそんなに嬉しいのだろうか。

絶対腹を抱えて笑っているな、見なくてもわかる。

「あいつ、さっそく引っ掛かりやがった。音からすると、盗み聞き防止用のトラップだな。マキナー。あいつの間抜けなツラみにいこうぜ」

「う……うん」

ちょっと複雑そうな顔をしたマキナはレイと一緒に階段を駆け上がる。

確かさっきのトラップは盗み聞き防止用って言ってたし、どう言い訳しようか。

レイはもう階段を上がってきた。

「ばーかばーか。人の話を勝手に盗み聞きするから痛い目見るんだ。十分以上そこにいると爆発するように仕掛けといたんだよ」

ところどころ焦げて黒くなった服を指差しレイは笑った。

そこまで面白いか？ちょっといらつく。

「あー、悪かった。ちゃんとトラップは全部見つけて片付けておくから」

「お前に見つかるようなトラップなんてあるもんか」

レイは俺がトラップに引っ掛かったことで上機嫌。

よかった。これならなんとかこの場を乗り切れそうだ。

「……全部って、お兄ちゃん、なんでトラップがいくつもあるって知ってるの？」

沈黙。

マキナのばかやろー。

「……おまっ」

一番はじめに口を開いたのはレイ。

「お前、もしかして始めっから全部聞いてたのか」

レイの顔が赤く染まる。

それを見て少なからず俺の心拍数も上がった。

「あー、大丈夫。忘れるから」

……

「何が大丈夫だぁー！」

すっかりゆでダコみたいになったレイは手近にある物を掴んで投げつけてくる。

続きとび蹴り。

「ちょ、ちょっと」

レイ、爆裂系最大の呪文を詠唱中。

さすがにレイの呪文は俺の簡易版防御壁では防ぎきれない。もし防いだとしても、周りに被害が出る。

……仕方ない。

「杖よ。我が前のものに風を与え、戦意とともに武器を消し去れ。武装解除」

いつもながらめんどくさい呪文だと思う。

だけど今はそんなこと考えている暇はない。

最終手段を使ってしまった以上、全力で逃げないと、いろんな意味で……死ぬ。

のに、

……動けない。

「バカヤロー、ほんっとに……ばかやろー」

「……」

泣いていた。

俺の背中にしがみつきながら。

今まで泣いたところなんて見たことなかった。

「ごめん」

それしか言えなかった。

レイが泣いていることに耐えがたい罪悪感を感じた。

「ん、悪かった。俺、出てくから。だけど、マキナは宿なしにしたくないから、少しの間泊めといてやってくれな。頼む」

「……バカ、お前もいていいから」

「ん、なんだ？」

「お前もいていいって言ったんだ。一度オッケーって言ったんだから、責任くらい持つさ」

「本当にいいのか？」

「ああ……」

「ありがと」

俺は今日初めてレイと、目を見て話した気がした。

……

……

今度はふくれっ面したマキナが最初に沈黙を破った。

「こら、レイ姉。いつまでお兄ちゃんにくっついてんのー」

「「！」」

二人してお互いを突き放す。

「その……」

「……なんだよ、早く言えよ」

「非常に言いにくいんだけど」

「だからなんなんだよ」

「服……着た方がいいぞ」

レイは自分が武装解除をかけられた事をすっかり忘れていたらしい。

見事なほどのアバウトさ。

そんなレイはまた顔をゆでダコのようにし、俺の顔を殴った。

「お前にはデリカシーってもんがないのかー。っていうか、早く言えーー」

「お兄ちゃんのバカァ、レイ姉にデレデレしてー」

なぜかマキナからも責められた。

さっきの一言が決めとなり、病院の看護婦さんに「またきたの？」と言われるはめになった。

第四部

さて、どうしたものか。

……なかなかになかなかだと思う。

自分でもなにを言っているのか分からなくなってきた。それもそうだ。二度目に退院してから、ありえないくらい何も起きない。マキナはここ最近あんまり話をしてくれない。俺が近付くとそそくさと、まるで何か隠すように離れていく。

……おれ、何か悪いことしたっけな？

「マキナ、おいマキナっ」

寝ぼけたわたしの枕元でそっとレイ姉が囁いた。

「おい、マキナっ、起きろ朝だぞ」

たとえお天道様が昇っても眠いものは眠い。

私が動かずにじっとしているとレイ姉が私を少しだけ力強く揺さぶった。

「ほら、マキナ、起きろっ」

「……あと五分だけー」

「そのセリフはさっきも五分前もその更に十分前にも聞いたぞ」
「じゃああと五分ー」
「伸ばすなっ！　っていうか起きろ」
「お姫様はお兄ちゃんのきっすでしか目が覚めないのです」
「……おーい、トーマぁ。マキナが起こしてくれって」
えっ！　ほんとに呼んじゃうの？　ちょっと待ってよこれじゃ私がレイ姉にも言ってない壮大な計画が始まったばかりで水泡ときすよ！　そんなのヤダ。起きたばかりで髪もぼさぼさ。
「ちょっと待ってレイ姉やだ呼ばないで断固否定地球が消滅してもダメ起きるからあー」
私が全力で否定するとレイ姉がくすくすとおなかを押さえながら笑っている。
「くくっ。あはは。マキナ、トーマはいまいないぜ。昨日から出張中だ。マキナがそうしてくれって頼んだんだろ。忘れたのか？　あはは、おもしれっ」
「あっ」
そだった。お兄ちゃん昨日からいなかった。自分の間違いにだんだんと顔が赤くなるのが分かる。なんとかして誤魔化そう。

「……レイ姉おっはろーっ！」

「……お、おう。おはよう」

私のテンションに驚いたのかレイ姉は『目を丸くする』という表現がぴったりの表情をした。なんかうれしい。してやったりぃって感じ。

私はそのまま布団から飛び起きささっと着替えを終える。

レイ姉はいつの間にか朝ごはんの仕度に取り掛かっていた。最近のレイ姉はおかしい。私から見てもやけに色っぽい。言葉遣いは前とあんまり変わってないんだけど少しだけ丁寧になっている。……気がする。

そんなことを考えていたらあったかいお味噌汁のにおいがふんわりと漂ってきた。

「マキナーっ。朝飯だぞー」

レイがマキナを二回目に起こそうとした頃

……飛行機に乗るなんて久しぶりだな。

そんなことを考えつつ俺は空港で買った塩気の薄い弁当をのろのろと食べていた。

空港まで来るのに丸一日かけ、そこからまた飛行機で丸二時間。長旅もいいところである。少しばかりマキナの事が気になったが、レイもマキナを見ていてくれているし大丈夫だろう。

……あー、めんどくさい。

窓から外を覗こうとしたが、俺は通路側の席なので無理だった。変わらない風景。一人旅。

一人旅って言うと結構ロマンティックに聞こえるが実際結構ヒマだ。やることもないし話し相手もいない。

マキナは暇してないかな。

あーー早く帰りたい。

「マキナ、お前大丈夫か？」

起きたらレイ姉が私の枕元で心配そうに覗き込んでいた。

「覚えてるか、お前いきなり調理場で倒れたんだぞ」

目が覚めのボーっとした頭で何があったか思い出そうとする。

そっか、お兄ちゃんが出かけて四日目になんか急に頭がくらくらしてきて倒れちゃったんだ。どうしたんだろう、私。

「ったく、心配したぜ。熱も無いし、医者も呼んだけど全く異常な

いってさ。もしかしたら魔法使い特有の病気かと思って治癒術師にも来てもらったけど、なんでもないって。今の気分はどうだ？」

「ふらふらする。なんか頭もボーっとしちゃって」

「まあいいや。なんでもないんならちょっと寝れば治るだろ。今日一日くらいゆっくりしな」

「ありがとう、レイ姉」

何で頭がくらくらするんだろう。寝てても気分が悪い。

レイ姉が仕事に戻った後、布団にくるまったままふと横を見ると作ったばかりのお粥が置いてあった。レイ姉の心遣いが妙にうれしい。

後でお礼を言おう。

ボーっとした頭でそう考えるとまた私は布団に包まった。

よおっしゃーーっ。やっと帰ってきた。

思えばこの一週間とてもヒマだった。レイに頼まれたことを終わらせた後はずっと暇をもてあましていた。正直忙しいことよりも辛い。

また俺は今日からレイにこき使われると思うけど、やっぱりそっちのほうがいい。

ヒマよりましだ。

あとは一日かけて家に帰るだけ。マキナとレイになにかお土産でも買って帰らないとな。きっと早く早くとせがまれる。俺が帰ったらきっとマキナは俺に飛びついてくるはずだから、あいつが帰ってきたときみたいにフェイントをかけてやろう。ぎりぎりまで待たせるんだ。

そんな意地の悪いことを考えながら歩いていると、いつの間にかバス停に付いた。もうバスは来ていたので急いで乗り込む。

暫くたち、帰りの飛行機でも見られなかった外の風景を見ると行きと微妙に違うことに気が付いた。

……乗るバス間違えた。

「すいませーんっおろしてくださいっ」

俺はあわててバスを降りると、元のバス停に戻るためのバスを待った。

「くそーーあのやろーまだ帰ってこねえのか」

下の階からレイ姉のいらいらした声が聞こえる。今日お兄ちゃんは帰ってくるはずだ。本当は真っ先に出迎えて飛びついてやりたいのに、それも出来ない。

まだ体の調子がおかしい。前より悪くなっている。なんでもないは

ずなのになかなかよくならない。レイ姉が心配してもう一度医者を呼んでくれたけど、結局原因はわからないまま。

時刻はもう既に夜中の十一時。

お兄ちゃんどうしたんだろう。不安になってくる。事故にあったとか、通り魔に襲われたとか。よくないことが頭の中を駆け巡る。

家のインターホンがなった。

「お兄ちゃん！」

かぶっていた布団をがっとめくり、階段を駆け下りて玄関へと向かう。

玄関には……レイ姉にはたかれたばかりのお兄ちゃんがいた。

「何やってんだてめえっ。遅くなりやがって。マキナが今どうなってんのか分かってんのか」

「バスを乗り間違えたんだよ。どうしたんだ一体。いきなりぶっ叩いてきて」

「マキナが倒れたんだよ」

「そこに居るじゃんか」

「えっ」

確かに私は二人の目の前に居た。パジャマ姿で。

「マ、マキナ、もう大丈夫なのか？」

そういえばもう頭のふらふらも治っている。なんでだろ。

「ったく。びっくりするような事言いやがって」

「マキナ、治ったんだな。よかった。……よかった」

強いて言うなら、今回のことは酸素不足みたいなものだったんだろう。お兄ちゃんに会いたいのに会えなくて、ずっと我慢してたから。今まではこんなこと無かったのにな。

ちなみに、お兄ちゃんがお土産を買い忘れてきました。当分の間はこれを根にもってお菓子とかケーキとかいっぱい買ってもらおう。

第五部

――あれ、私死ぬのかな？

買い物の帰り道に居眠り運転の車にはねられたカノンは薄れていく意識の中、夜空の赤い月にある人の顔が見えた。

――あの人、私の初恋の人だ。魔法学校に居たときの私の先輩。

体が動かない。

――まだ死ねない。死にたくない。

カノンの意思に反して、意識は少しずつ闇の中へと引きずり込まれていった。

「失礼いたします」

レイと俺は玄関で礼儀の正しそうな女性を出迎えた。彼女は、東洋の島国から来た、『巫女さん』と呼ばれる仕事をしている人らしい。俺にはよく分からないが……

「あー、散らかっているけど上がってくれ」

レイは何時も通りの態度で接している。こいつのこういう所は流石だなと毎回思う。ちょっと口に出しては言えないけど。

「春日野さん。そこらへんの椅子に座ってて。お茶を入れてくる。紅茶でいいか」

出来れば緑茶をいただければ……あと、なるべく椿と下の名前で呼んでいただけませんか。堅苦しいのは苦手ですので」

そう言って椿さんは椅子の上にちょこんと座った。正座で。

「あの、足痛くなりませんか？」

「はい、大丈夫です今までも座るときはいつも正座だったもので……今ではこの座り方以外だとなんだか落ち着かないんですよ」

「へー、そうですか。慣れみたいなものなんでしょうね」

「そうですね。トーマさんもやってみたらどうですか？」

「あ、なら少しだけ……」

俺も椅子に正座した。あれ、意外と痛い。なれない座り方で足に少し違和感を覚える。だめだ、もう足が痺れてきた。

「あの～」

「……」

「あのお～」

「……」

「大丈夫ですか？」

俺の表情の微妙な変化と返事が無いことに不安を覚えたのか、椿さんが心配そうに声をかけてきた。

大丈夫じゃありません。痛いです。ものっすごく。痛すぎて足をくずせません。つまり負の循環。

「おいトーマぁ。茶ぁ入ったから取りに来ーい」

レイが俺を呼んだ。最悪のタイミングで。

「あ、私が行かせていただきます」

俺を気遣ってくれたのか椿さんはレイの声がしたほうに向かった。罪悪感。スミマセン。ありがとうございます。

「なにやらせてんだてめえっ」

とたんレイのドロップキックが顔の右側面に入った。激痛。主に正座の崩れた足に。

「レ、レイさん。トーマさんは正座して足が痺れていて……元はといえば私のせいですし」

「呼ばれたら足が無かろうが死んでいようが這ってでも来なきゃいけねぇんだよ。それが漢だろうが」

無茶言うな。それに俺は男だ。って言うかレイがなんかいつも以上

に苛々している気がする。

「はぁ、呆れた。まあいいや。椿さん。いきなりだけど今日呼んだ理由説明していいか」

いきなり本題に入ったな。でも、そういえば俺もレイから聞いていない。何なんだろう。

「ここ最近さ、幽霊の気配がするんだ。というわけで、除霊よろしく」

……またなんか突拍子も無いことを……

「はい。先ほどから気になっていましたが、トーマさんの背中に憑いていますよ」

……えっ？

「な、トーマ。いるだろ。どーせお前はまた『突拍子も無いこと言い出した』なんて思ってたんだろうが」

まあ、確かに。

「それにお前、いま椿さんの言葉を聞くまでは完全に疑ってただろ」

今も疑ってる。信じられない。しかも俺の背中に憑いている？

「悪い霊ではないようですが。すぐ除霊するのもかわいそうなんでまずは皆さんの目に見えるようにして話でも聞いてみましょうか。カノンという名前の子の霊です」

……カノン。どこかで聞いたことあるような。

椿さんは巫女服の袖からよく分からない文字のかかれた札を取り出し、俺のほうへ向けた。先ほどまでの落ち着いた様子からは全く想像もできないほどの殺気を放っている。俺の背後の幽霊にむけられているのは分かるけど、正直怖いです。

椿さんの手で一瞬だけ札が強い光を放った。俺は恐る恐る背後を振りかえる。

……何も居ない。目に見えないままなのだろうか。

「ト、トトトーマ。頭の上……」

上？

首を傾け上を見てみる。白の中にイチゴの模様。その周りをひらひらした服が囲っている。

微妙に。ほんの少しだけど暗い。昼間にカーテンを閉めたような感じ。

理解した。

俺はむんずと頭の上に載っているものを思い切りつかむと、そのまま引き摺り下ろした。

「きゃっ」

小動物のような高めの声。

「いったーい。ひどいよ～」

かわいい女の子が地面にしりもちをつき、目に涙をためてこちらを見ている。その女の子は椿さんの方に目をやると一瞬だけびくっとなった。

「な……なんで椿がココに？」

「なんでも何もないの。あなたが化けて出てきたから退治しに」

「ちょ……」

「あのー……」

レイが二人の間に口を挟む。

「どういうことでしょう？今の会話を聞いていると二人とも知り合いらしいけど、説明していただけませんか？」

「あ、はい。分かりました。えーっとですね、この子はカノンっていいます。私の幼馴染なんですど」

幼馴染か。レイと俺に似たような関係だな。

「私のほうが五つ上で、私たちは魔法学校に通ってたこともあるんですよ」

ますます似たような関係だな。

「先週この子、事故で死んでしまいまして、葬式を挙げたばっかりなんです」

葬式って……ええ？

「化けて出ないか心配していたんですけど、案の定……」

そこはまたあえてうれしいところじゃないのかな。

「で、成仏をしようと思うんだ」

椿さんにこってり説教されたカノンは正座で俺たちのほうを向き直ると泣き目で言った。

「幽霊って、よく言われるみたいに心残りがあって成仏できないのよ。だから協力してあげてね」

椿さんはにっこり笑うと俺とレイのほうを向き直った。

「心残りか。現世に未練が残るくらいのものだろ。いったいなんなんだ」

レイがカノンの前に立ち、慰めるように頭をなでる。

「トーマと……スしたい」

カノンはぼそりとつぶやいた。

「ん、何したいんだ？」

「キスしたい」

はあああああああああああああああああああああああああ？

「トーマ私が魔法学校居たときに始めて好きになた人なんだよ。死ぬ前に一回くらいキスした言って思うのは当然でしょ」

何でそうなるんだよ、って言うか、こんな子居たっけな？

「ダメだぁーー」

レイが叫ぶような大声で否定する。俺はどちらにも何も言えない。

「なんでよ？」

カノンが口を尖らせる。

「ダメなものはダメだダメって言ったらダメなんだこれがこの世の真理だあきらめろー」

「なぁーっ」

ぴりぴりする二人の間に椿さんが割って入り込んだ。

「お二人とも大事なこと忘れていませんか？幽霊ですよ。実体がありません。大丈夫です」

「それは大丈夫だもん」

カノンが自信満々に暗くなった空を指差す。

「今夜は満月でしょ。この地には満月の晩にピンク色のウサギが一匹だけ卵を産みに来るの」

ウサギは哺乳類です。

「そのウサギは卵を産むときに痛みに耐えかねて涙を流すのよ」

非常識な。ウミガメじゃあるまいに。

「そのウサギの涙に触れると幽霊は実体化できるって言う伝説が幽霊たちの間ではやってるのをここに来るまでの間に聞いたの」

噂かよ。

「だから、協力してくれれば私は成仏できるの」

椿さんは表情をくずさないがレイはなにか怪訝そうな顔をしている。それはそうだろうな。

椿さんが俺とレイに小さく耳打ちしてきた。

「協力してあげてください。そんなウサギが居ないって事が分かればあきらめて成仏すると思いますから」

「ったく、仕方ねえな」

レイが不満そうに背伸びをする。

「いたーーー！」

黄色い声が上がる。カノンだ。指差す先にはピンクのウサギが店の前で涙を流して卵を産んでいた。

「ほんとにいたんだな……」

俺は呆然とその姿を見つめた。椿さんとレイも驚きを隠せていないらしく、口が開きっぱなしになっている。

ただ一人カノンだけは窓から飛び出してウサギを捕まえると涙に触った。その瞬間、カノンはぼんやりとした光に包まれた。

「わ、わあっ……」

手を二、三度握ると近くに生えていた木に触る。

「うわぁっ」

満面の笑みで俺のほうに向かってきた。

「やったやったやったー。ほんとになれた。キスしてー」

「ちょ待て」

俺はあわててカノンから離れる。

「なんで逃げるのよー」

「なんで追ってくるんだー」

少し離れたところでレイと椿さんがゆっくりお茶を飲んでいた。レイももうすっかり疲れてしまったらしい。

「なあ椿さん。もうほっといていいかな」

「いいんじゃないでしょうか。本人がよければ。あ、あとあなたはいいんですか？」

「もういいよ。疲れた」

「でもあれ……」

椿さんは俺を追うカノンのほうを向き直る。

「男ですよ」

……は？

「もういいんじゃねえかな」

レイは勝手なことを言っている。よくねえよ。

その瞬間、俺の記憶の中で何かがつながった。

魔法学校で同じ部活の後輩だった男の子のカノンの顔が浮かぶ。

後ろを振り返ると、なんとなく当時の面影が残ったカノンの顔が迫ってくる。

「悪霊たいさーん」

追いかけっこは結局朝まで続いた。疲れた。いろいろな意味で。

「じゃあ私、帰りますね」

椿さんはあくびをしながら店から出て行った。

「お前はいいのか？　もう朝だぞ」

レイはカノンに問いかける。

「実体化しちゃったからもう朝になっても消えないし」

笑いながら言うと俺のほうを振るかえる。ということは……。

「キスしてー」

当分消えてくれそうもない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9217m/

まじっくガーデン

2011年2月2日23時31分発行